



第 1 日

国 語

(9 : 30 ~ 10 : 20)

注 意

- 1 検査開始のチャイムがなるまで開いてはいけません。
- 2 問題用紙の1ページから14ページに、問題が一から四まであります。
これとは別に解答用紙が1枚あります。
- 3 問題用紙と解答用紙に受検番号を書きなさい。
- 4 答えはすべて解答用紙に記入しなさい。

受検番号	第	番
------	---	---

一次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

鷹匠である老人は、優れた若鷹を手に入れ、「吹雪」と名付けて育て上げた。ある日、安楽城村(現在の山形県真室川町)の村長に赤ぎつねの退治を依頼され、退治に向かった。赤ぎつねとの戦いは壮絶で、激しい攻防の中、鷹匠は吹雪を見失い、吹雪の行方は分からなくなってしまった。吹雪がその後どうなったのか、手掛かりのないまま四日目が過ぎようとしていたその日の夜、吹雪は鷹匠の家にもどってきた。

吹雪は弱りきっていた。左の翼はだらりと下がり、羽は折れ、爪ははれ上がつて止まり木に止まることすらできなかった。ただその刺すようなまなざしが、「失敗はしたが、負けたのではない。」とうったえていた。

鷹匠は腕に水をくみ、傷ついた親友に与えた。吹雪は少しだけ飲んだ。折れた羽を切り、肉と皮の間に出来た気泡をしばって空気を押し出し、青木の葉をすって酔いとかした汁を傷口に付けた。鷹匠は眠らずにみとった。この傷で、野生にももどらず、自分のふところにもどってきた吹雪がいとしくてならなかった。手当ては順調に進み、吹雪の傷はぐんぐんとよくなった。春、ねぐら入りの季節が来るころには、いちばん重かった足指のはれもほとんど引いていた。吹雪は戸外の鷹小屋に移され、また太った。

しかし、鷹匠にはおそれが残った。吹雪の闘魂が、負傷と同時に傷つけられてしまったのではなからうかという心配だった。の傷は治しても、気性の傷は治すことが困難である。おびえのきた鷹は救い

と充実した体力とがみなぎった。鷹匠は、おいつこを安楽城村の村長のもとにやり、猪ノ鼻岳の赤ぎつねの消息を尋ねた。心の中では、どうか元気でいてくれるようにといのりながら……。

おいつこは間もなくもどってきて、赤ぎつねはますます老獺になり、このごろでは昼間もおおっぴらに現れるようになって、村でも手を焼いていることを話し、「だども、『鷹ではもうだめだべ。』と、村長は言うけ。」と報告した。鷹匠は、おいつこにはなんにも言わなかった。老人はだまって鷹部屋に行くと、吹雪をこぶしにすえ、「いいか、吹雪。今度こそだじえ。」と、吹雪の胸骨をなでた。

鷹匠は、間もなく、吹雪と安楽城村に行った。家人の心配も、村人の軽蔑も、問題ではなかった。鷹匠は、赤ぎつねの足どりややり口を調べ、翌朝早く、吹雪をこぶしにすえて弁慶山に急いだ。弁慶山は、峰統きの猪ノ鼻岳より百二十メートルほど高い。上から下を襲うという鷹族の習性に従って、鷹匠は弁慶山の頂にたらずんで待った。めずらしく風はなく、死のような静寂が峰を包んでいた。峰の上には、星がこおっていた。そのため、寒さがいつそう厳しく感じられた。

鷹匠は、吹雪を温めるようにだいて、じっと待ち続けた。やがて東の空に、青白い朝の気配が動き始めた。鷹匠と鷹は更に待った。時がたった。日はまだ出ないが、周囲は白く明るくなった。雪の反射が視界を広げた。と、魚止森と猪ノ鼻岳の間の相沢川を渡って、ちらっと動く黒点が見られた。吹雪のひとみが鋭く光った。鷹匠は双眼鏡を取り出し、目に当てた。黒点は、まぎれもないあの赤ぎつねだった。が、赤ぎつねも、この三年間に見違えるほどただけしくなっていた。彼は、今朝も口に

がたい。

鷹匠は、吹雪がきつねをおそれることをおそれた。一匹のきつねをとる、とらないは、収穫の上ではたいした問題ではなかった。しかし、鷹匠としての、また優れた鷹としての誇りからいえば大問題だった。獲物をおそれる鷹は、名鷹とはいえない。同時に、そんな鷹を作り上げた鷹匠も、名匠とはいえないのだ。鷹匠が六十余年の生活の最後を飾るものとして探し出した吹雪、そして、長くない全生命をかけているこの吹雪が、あの赤ぎつねをおそれるとしたら、すべての希望は足下からくずれ去るのだ。鷹匠は苦悶と苦悶の日を重ねた。そして得た結論は、死か名譽かであった。愛するものを失うか、誇りを守るかであった。すべてを得るか、すべてを無にするかであった。鷹匠は、もう一度吹雪をあの手で、猪ノ鼻岳の赤ぎつねと戦わせようと決心した。今度こそあの赤ぎつねを倒すか、吹雪を失うかのだ。

鷹匠は準備に取りかかった。再び、「詰め」の季節が来た。吹雪は精悍にやせた。狩りの冬、鷹匠は、もううさぎや山鳥を追わせなかった。野犬にかからせ、ねこを襲わせた。飼いきつねを求めて、それをもねらわせた。ふくろうやおお鷹も訓練の犠牲に供した。爪とぎばをもって抵抗する生き物は、次々と吹雪の前にほうり出され、吹雪の爪とくちばしとを鋭く研いだ。これが、その後三年間の鷹匠と吹雪の生活だった。いよいよ戦いの時が来た。鷹匠は慎重に詰めた。例年ならば野生にもどるのをおそれて体力を落とすのだったが、鷹匠は吹雪に勝敗のみをかけた。十分に戦えるためには、やはり強い体力を与えねばならない。「詰め」は早めに切り上げられた。吹雪は七歳。羽毛は黒褐色となり、闘志

獲物をくわえていた。赤ぎつねは、一度川べりの林の中に姿を消したが、しばらくするとまた出てきた。そして、今度は尾根に登り始めた。

鷹匠は、まだ吹雪を放さなかった。彼はふり返って、吹雪の様子を見ながら、もし吹雪が羽毛をふくらませているのであったら、この鷹はおそれるを感じている。だが、吹雪は、静かに時の来るのを待っている。この前のような興奮した荒々しさは見られなかった。

うん、これなら大丈夫だ——と、鷹匠は自信を持った。赤ぎつねは、猪ノ鼻岳の山頂に近いこんもりと茂った森に入ろうと急いだ。そこに彼の家があるらしかった。鷹匠は、吹雪の脚に付けてあった足革を解き放した。そのことは吹雪に全くの自由を、野生さえも許したことだった。吹雪が野生にもどろうと思えば、そのまま野生に帰る得るのだ。だが、鷹匠は、吹雪がこれから行う死を賭した決闘に、少しでもさまたげになるものは除かねばならぬと思った。赤ぎつねのにくしげな姿が、レンズいっぱいに広がった。その顔には、この前の戦いで吹雪が付けた爪跡が、まだ黒く残っていた。鷹匠は、こぶしを静かに引いた。吹雪は、冠羽を逆立て、身をしずめた。「それっ！」鷹匠のこぶしが気合いをこめて前方に突き出されると、吹雪の体は軽々と飛んだ。

(戸川幸夫 「爪王」による。)

(注1) 鷹匠 鷹を飼育、訓練して、狩りをする人。

(注2) ねぐら入り 鳥が巣ごもりする四、五月の繁殖期。

(注3) 苦悶 苦しみをだえること。

(注4) 「詰め」 絶食させること。

(注5) 精悍 || 動作や顔つきが鋭く、力強いこと。
 (注6) 老獪 || 経験を積んでいて、悪賢いこと。
 (注7) だども || けれども。
 (注8) 足革 || 狩りのときに鷹の脚に付ける革ひも。

1 ㊦㊧の漢字の読みを書きなさい。

2 に当てはまる適切な語を書きなさい。

3 ① どうか元気でいてくれるようにといのりながら……とあるが、鷹匠が、このようにいのっているのはなぜですか。四十字以内で書きなさい。

4 ② 手を焼いているとあるが、この表現は、どのような様子を表現したのですか。次のア～エの中から最も適切なものを選び、その記号を書きなさい。

- ア いい加減な気持ちで対処している様子。
- イ 対処や処理に苦労している様子。
- ウ 密かに人を使って調べたり、働きかけたりしている様子。
- エ 将来を予測して対策が立てられている様子。

5 この作品(戸川幸夫 「爪王」)は漫画化されており、次の【資料】は、この文章の続きの場面を描いている漫画の一コマです。この文章の続きの場面を漫画で読んだ生徒と小説で読んだ生徒が、【資料】に書かれている鷹匠のせりふについて会話をしています。あとの【生徒の会話】はそのときのものです。これらを読んで、空欄Ⅰ・Ⅱに当てはまる適切な表現を、それぞれ書きなさい。

【資料】



(矢口高雄 「野性伝説 爪王」による。)

【生徒の会話】

西川… 僕はこの文章の続きを漫画で読んだよ。吹雪と赤ぎつねの決闘後の一コマがこれだよ。

鈴木… あれ？ 僕はこの文章の続きを小説で読んだんだけど、【資料】のせりふは書かれてなかったよ。この一コマは、小説では「吹雪は、激しい息遣いをしながら、赤ぎつねをしつつかと押さえ付けて、誇らしげに待っていた。」という描写のみで鷹匠の言葉は書かれていないんだよ。どのようにして、このせりふは生み出されたのかなあ……。僕は、鷹匠が吹雪の足革を解き放して戦いに行かせたときの、鷹匠の決意が関係していると思うなあ。

西川… 確かにそうだね。そのことに加えて、これまでの吹雪との関係から生まれた鷹匠の気持ち、このせりふに表現されているんじゃないかな。僕は、吹雪が(Ⅰ)にも関わらず、赤ぎつねを倒して、鷹匠を誇らしげに待っていたところから、鷹匠の吹雪に対する称賛と、(Ⅱ)気持ちから生み出されたせりふだと考えたよ。

鈴木… そうだね、僕もそう思うよ。その鷹匠の気持ちが漫画では「おめえってヤツはおめえってヤツは…」という言葉で表現されたんだね。

二次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

クラシック音楽にあまり興味のない方とお話していると、「クラシック音楽は誤解されているなあ」と思うことがしばしばあります。

「オーケストラのコンサートって、スター指揮者が大げさに指揮棒を振って、オーケストラは糸乱れぬようにそれに従って、ひたすら美しい音楽を奏（かな）でることを目指しているんでしょ？」と考えられているようなのです。音楽家やクラシック音楽愛好家にとっては、クラシックがこのような受け止められているとは思ってもよらないことでしょう。

美しいアンサンブルはクラシック音楽のもつ大切な要素の一つではありませんし、正確で的確な音を演奏するために日々精進し、演奏技術を磨くことは、演奏家にとって非常に重要なことです。そして実際に、この数十年という時間で考えれば、演奏技術は目覚ましく進歩しています。これにより、より正確で美しいサウンドをもつ演奏が実現できるようになりました。オーケストラという、八十人以上もの音楽家が同時に演奏する場において、正確で的確なアンサンブルを奏でることの重要性は、今後増しこそすれ、減ることはないでしょう。

しかしながら、本来オーケストラコンサートの目指すところを簡単に言えば、作曲家のビジョン・想念・感情などを、指揮者・オーケストラを介して聴衆に深く味わってもらうことなのです。「正確で的確なアンサンブル」は、そのような演奏に必要な要素と言えるかもしれませんが、それ自身がクラシック音楽の本質なのではありません。そして、自ら楽器をもたない（音を奏でることのできない）指揮者という名の「音楽家」

が、いかにして自分の音楽をオーケストラに、味わい深い音楽を奏でさせるのか——その実現と、そこに至るまでの過程こそがオーケストラの醍醐味である、私は考えます。

クラシック音楽は、決して耳に心地よいだけの音楽ではありません。調和や栄光、自然の美しさを表した曲も数多くありますが、心の葛藤や後悔、別れや悲しみ、そしてあきらめという人間の負の感情に触れるものも少なくありません。耳に優しい和音、いわゆる調和した響きというものは確かに美しく、それだけでも人に生きてきた意味を感じさせることもあります。しかし、音と音が調和せずにつぶかり、強い緊張感とどこへ向かうかわからない違和感を与える和音も、同様に人々の人生を音楽で表現するには重要な要素なのです。

作曲をするとき、優れた作曲家は往々にしてそうした緊張感を伴う和声（和音の流れ）の後、シンブルで美しい和声へと、劇的にその音楽を昇華させるものです。不安を乗り越えた先の満足、ルードヴィヒ・ファン・ベートーヴェンの『交響曲第九番』ではありませんが、苦悩の後の歓喜、そのストーリー自体がカタルシスを感じさせると言えるでしょう。人は音楽に広い意味での「物語」を感じ、自らの人生を無意識に重ね合わせ、感動するのです。

もちろん、オーケストラの面白さというのは、人によって、また、時によって様々です。そこに込められた意図はわからなくても、ただただ「美しい」と感じさせる演奏もあります。それだけで「これは価値がある演奏だ」と思っで興奮するのもよいでしょうし、時として、何かの原因でばらばらになりかけたオーケストラのアンサンブルが、それでもぎ

りぎりのところで美しさを目指してまとまろうとする姿に興奮するのも、どちらもあなたの人生にとって意味のある楽しみ方なのです。

しかし、一つだけ確かなのは、ステージの上で意味のあることが何も起きていないオーケストラのコンサートは面白味に欠けるものである、ということだと思います。私は、たとえ正しい音符に正しいリズム、美しい音があつたとしても、そこに興奮や喜びを感じさせる「何か」がなければ、それは価値ある演奏とは言えないと考えます。

日本でもよく知られているヘルベルト・フォン・カラヤンという指揮者はピョートル・チャイコフスキーの『交響曲第六番 悲愴』だけで六回の録音を残しました。これは、曲の解釈が時代や指揮者自身の成長・変化によつてもコトなることや、オーケストラが違えば同じ曲でも演奏するたびに違う表情をもつということが前提となつています。指揮者が圧倒的な創造意欲というものをもつていれば、同じ演奏が繰り返されることはまずありえないことなのです。

つまり、オーケストラの演奏はルーティン化したお決まりの演奏（音楽）を味わうためのものではなく、もつとスリリングな楽しさをもつていくということです。指揮者が楽譜から曲のビジョンをどう読み取ったのか、そしてどう曲を解釈したか、さらにそれがどのようにオーケストラに伝わり、その情熱が音としてどう現れたかという、その演奏の一回性にこそ、真の楽しみがあるのです。

（藤野栄介 「指揮者の知恵」による。）

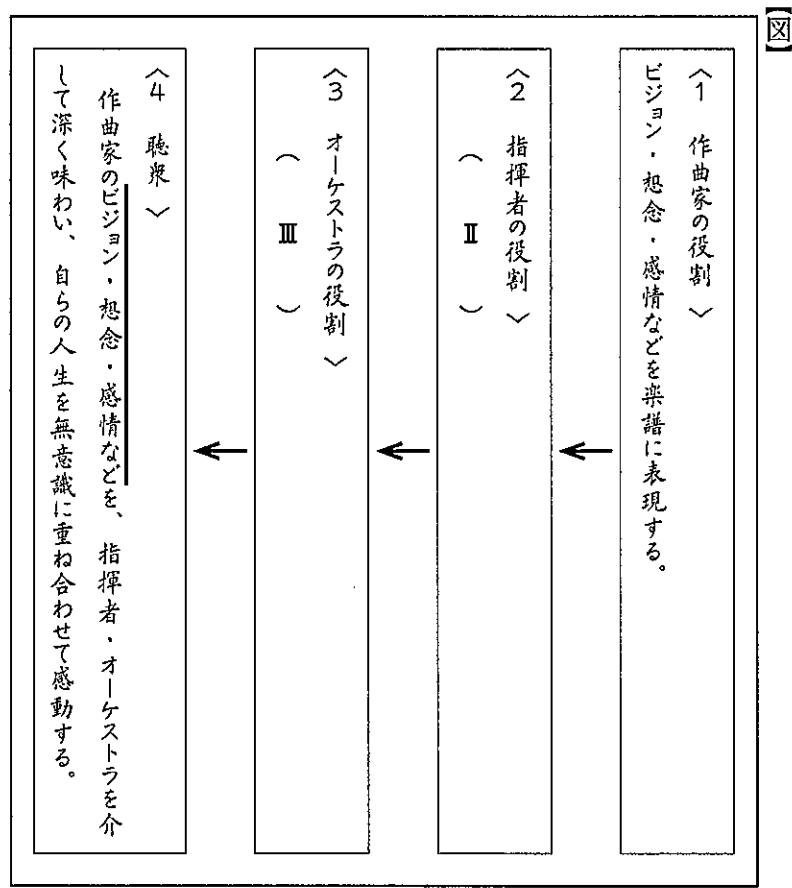
- (注1) アンサンブル 演奏の統一性やバランスのこと。
 - (注2) ビジョン 構想。
 - (注3) 醍醐味 物事の本当の面白さ。
 - (注4) カタルシス 心の中に解消されないうで残っていたある気持ち
 - (注5) ルーティン いつも行う手順。
 - (注6) スリリング 是らはら、どきどきさせるさま。
 - (注7) 一回性 一回起こったきりで、繰り返すことがない性質。
- 1 ㊦・㊧のカタカナに当たる漢字を書きなさい。
- 2 に当てはまる最も適切な語を、次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア 確かに イ むしろ ウ けれども エ なぜなら

3 クラシック音楽は、決して耳に心地よいだけの音楽ではありませんとあるが、次の文は、このことについて筆者が述べていることをまとめたものです。空欄Ⅰに当てはまる最も適切な表現を、文章中から十字以内で抜き出して書きなさい。

クラシック音楽では、美しい調和した和音の響きで栄光や自然の美しさを表現するだけでなく、調和せずにつづかり、強い緊張感と違和感を与える和音によって（Ⅰ）を表現することも、人々の人生を音楽で表現する上で重要である。

4 価値ある演奏とあるが、次の【図】は、国語の時間にある生徒が、この文章における筆者の主張を踏まえ、オーケストラの演奏が価値ある演奏に至るまでの流れをまとめたものです。これを読んで、あとの(1)・(2)に答えなさい。



(1) 空欄Ⅱ・Ⅲに当てはまる適切な表現を、それぞれ二十五字以内で書きなさい。

(2) さらに、この生徒は【図】中の傍線部分について、ベートーヴェンの『交響曲第九番』の演奏を聴いた聴衆が、ベートーヴェンのどのようなビジョン・想念・感情などを味わって感動に至るのかということに興味をもち、次の【ノート】にまとめました。あとの【資料】は【ノート】にまとめるために準備したものです。この【ノート】の空欄Ⅳに当てはまる適切な表現を、本文の内容と【資料】の内容を踏まえて七十五字以内で書きなさい。

【ノート】

ベートーヴェンの（Ⅳ）を、指揮者・オーケストラを介して深く味わい、自らの人生を無意識に重ね合わせて感動する。

【資料】

ベートーヴェンの生涯最後の交響曲として、また、合唱が導入されている点においても有名な交響曲第九番。最も知られている第四楽章はドイツの詩人シラー作「歓喜に寄す」に曲をつけたもので、この詩は人類愛を歌い上げており、十代のベートーヴェンはその詩の内容に強く共感し、ずっとその感動を心の中に大切に

しまっていた。

その後のベートーヴェンは、作曲家として成功する一方、家族とのめめ事や友人との別離を繰り返し、耳の具合も悪化の一途をたどっていた。不器用ながらも人間関係を大切にしていたベートーヴェンにとっては非常につらい日々だったが、この時期は、作曲の試行錯誤を重ねることができた期間ともなった。そして、ついに五十代で、長年抱えてきた、シラーの詩に対する感動を表現するべく、一心不乱に作曲に打ち込んだ。シラーの詩に出会ってから、三十二年を経て完成した労作である。交響曲第九番こそまさに、ベートーヴェンの哲学そのものである。

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

柳は、花よりもなほ風情に花あり。水にひかれ風にしたがひて、しかも音なく、夏は笠なうして休らふ人を覆ひ、秋は一葉の水にうかみて

風にあゆみ、冬はしぐれにおもしろく、雪にながめ深し。

桜は、初花より人の心もうきうきしく、きのふ暮れけふ暮れ、ここかしこ咲きも残らぬ折節は、花もたぬ木の梢々もうるはしく、暮るれば

しこ咲きも残らぬ折節は、花もたぬ木の梢々もうるはしく、暮るれば

また、あすも来んと契り置きしに、雨降るもうたてし。とかくして春も

末になりゆけば、散りつくす世の有様を見つれど、また来る春を

たのむもはかなし。あるは遠山ざくら、青葉がくれの遅ざくら、若葉

の花、風情のおのの様ならず。桜は百華に秀でて、古今もろ人の風雅

の中立とす。

(「独」による。)

(注1) 笠 || 雨や雪、日光を防ぐために頭に直接かぶるもの。

(注2) しぐれ || 晩秋から初冬にかけて断続的に降る小雨。

(注3) 初花 || その年のその木に初めて咲く花。

1 覆ひの平仮名の部分を、現代仮名遣いで書きなさい。

2 次のア～エの中で、本文の内容に合っているものはどれですか。最も適切なものを選び、その記号を書きなさい。

ア 笠をもっていない旅人が、笠の代わりに柳の枝を手に持って歩く姿は趣があつて美しい。

イ 柳は、冬の小雨の中や、雪の積もった風景の中にあつても趣があつて美しい。

エ 花が散った後の桜の青葉が、枝で風になびいている様子も趣があつて美しい。

工 桜は満開の時が美しいが、雨が降る中で花びらが散っている様子も一段と美しい。

3 また来る春をたのむもはかなしとあるが、何をむなしといっているのですか。「……のに、……しまうこと。」という形式によって、現代の言葉を用いて書きなさい。

4 島内さんの班では、国語の時間に読んだこの文章の内容を踏まえて、卒業記念樹として植えるのは、柳と桜のどちらの木がよいかを提案するための話し合いを行いました。次の【生徒の会話】はそのときのもので、【ノート】は、島内さんが調べた内容を書いたものです。また、【下書き】は、島内さんが班で話し合った結果を提案するために下書きしたものです。あなたなら、どのように提案しますか。空欄Ⅰに柳か桜のどちらか一つの木の名前を書き、空欄Ⅱ・Ⅲに当てはまる適切な表現を、【ノート】と本文の内容を踏まえて現代の言葉を用いて書きなさい。

【生徒の会話】
島内… この文章を読むと、柳と桜に対する見方の違いが分かるね。卒業記念樹は、僕たち卒業生から在校生へのメッセージを込めて決めたいよね。決めるための参考になると思つて、柳と桜が詠まれている和歌と、「市の木」として柳や桜を採用している市のウェブページで、「市の木」に採用した理由も調べてみたよ。

坂倉… ありがとう。文章の内容と【ノート】とを参考にしながら一緒に考えよう。今年の卒業記念樹は中庭に植えるんだよね。中庭には花壇とベンチがあるね。木の種類だけでなく、在校生が見る景色も考えながら決めたいね。

中田… 私もそう思うわ。教室からも中庭が見えるよね。後輩たちが中庭を見て、どんな気持ちになる場所だったらいいかを考

えながら選ぶよう。

島内… 文章の内容と僕のノートをしながら、柳と桜のどちらを植

【ノート】

新古今和歌集より

うらなびき春は来にけり青柳の陰ふむ道に人のやすらふ

藤原高遠

〈現代語訳〉

春は来たのだなあ。青柳が茂って木陰を作っている道に、人が立ち止まって休んでいることよ。

桜咲く遠山鳥のしだり尾のながながし日もあかね色かな

後鳥羽上皇

〈現代語訳〉

桜の咲いている遠山の眺めは、長い長い春の日にも、見飽きない美しさであることよ。

柳や桜を「市の木」に選んだ理由

豊岡市(兵庫県)…しなやかで耐久力のある柳は、倒れても埋もれても再び芽を出すたくましい生命力を持ちます。雪の多い豊岡で、低湿地にもしつかりと根を張る柳は、豊岡市にとって最もふさわしい木と言えます。

小城市（佐賀県）：市内に日本さくら名所百選に選定された「小城公園」があり、県内有数の桜の名所として多くの観光客で賑わう。「力強さや生命力」、「優しさや美しさ」を感じる木として市民にも広く親しまれ、また、全国にシンボルとしてアピールできる木である。

【下書き】

選んだ木の名前：（Ⅰ）
選んだ理由：（Ⅰ）の木を選んだ理由は、後輩たちに（Ⅱ）というメッセージを伝え、中庭が（Ⅲ）場所であってほしいからです。



四 青空中学校の生徒会では、地域で行われる避難訓練に向けて、「生徒会だより」を作成することにしました。次の【生徒の会話】は生徒会役員の森下さんと松山さんが行ったもので、【資料1】・【資料2】は森下さんが「生徒会だより」を書くために調べて準備したものです。これらを読んで、あとの【問い】に答えなさい。

【生徒の会話】

森下… これから書く「生徒会だより」にはどんなことを書いたらいいかなあ。今度の地域の避難訓練で、僕たちは避難所での受付・誘導係を体験するんだね。避難所の受付・誘導係をするには、どんなことに気を付けるといいのかな。受付・誘導係の役割についてはメモをとって来たのだけど…。これがそのメモだよ。

【メモ】

受付・誘導係の役割
・避難してきた人に氏名の記入を依頼。
・避難所全体の地図の提示、及び体育館、教室への誘導。
・トイレと更衣室の場所を確認。
・廊下や階段の右側通行を徹底。
・立ち入り禁止エリアへの立ち入りは厳禁、喫煙は喫煙所のみ可能であることを確認。
・手洗い、うがいの励行、マスク着用の注意喚起。

松山… 地域の避難訓練には、子供からお年寄りまで様々な年代の人が参加するよね。このメモの言葉をそのまま伝えると難しいんじゃないかな。だから、必要な情報を分かりやすく伝えるために、留学生との交流会で使った「やさしい日本語」を使ったらいいんじゃないかと思うんだけど、どうかな。
森下… いい考えだね。でも、その交流会に参加していなかった人は、「やさしい日本語」について知らないかもしれないね。地域の避難訓練の受付・誘導係をするときに、「やさしい日本語」を使ってもらうために、「生徒会だより」に文章を書いて、載せようよ。

【資料1】

「やさしい日本語」とは

一九九五年一月の阪神淡路大震災では、日本人だけでなく日本にいた多くの外国人も被害を受けました。そこで、外国人が災害発生時に適切な行動をとれるよう、災害情報を「迅速に」「正確に」「簡潔に」伝えるために考え出されたのが「やさしい日本語」の由来です。「やさしい日本語」は、外国人だけではなく、日本人にも分かりやすい日本語です。災害時はもちろん、普段のコミュニケーションにおいても有効です。絵や地図を示したり、筆談や身振りを合わせた「やさしい日本語」を使うと、より効果的です。

